

イゾルデ

薄く射し込む朝の光は
ただひとり枕を抱く私には眩しすぎる
次第にふくれ上がってくる　　ざわめき
既に人々は一日の営みを始めているのに

昨夜の記憶はもう溶け去り
今残っているものは、私の想いだけ
肌触りや、慄えや、声や・・・
この想いが、それらの記憶とともにあるのなら
この朝もまた違っていたはずなのに

今日ひと日、どうやって始めればいいのか
どうやってベッドから起き出せばいいのか
この暴力的な昼を前にして！

毛布をかぶってさえ
枕に顔を押し付けてさえ
明るさが私を襲う
そして想いだけが私を締め上げてゆく

ああ、太陽よ、疾く駆け去れ
あの人に抱かれている時のみ
私の想いが身を引く時なのです
夜のしじまの中でのみ
私は立ち上がることができるのです

(1999.12.30)